

(別紙様式 10)

2019 年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分： 萌芽の異分野連携共同研究 共同推進研究
 産学官連携フュージビリティ・スタディ
 共同研究集会 産学官連携課題設定集会

研究課題名： 北極研究国際動向検討集会

研究期間： 2019 年度

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分 (注 1)
研究代表者	兒玉裕二	国立極地研究所・特任教授	雪氷学	
研究分担者 (拠点外)	山口一	東京大学・教授	船舶海洋工学	
	羽角博康	東京大学・教授	海洋物理学, 気候力学	
	高倉浩樹	東北大学・教授	社会人類学	
	町田敏暢	国立環境研究所・室長	大気科学, 炭 素循環	
	大西富士夫	北海道大学・准教授	政治学, 国際 関係	
研究分担者 (拠点内)	青木輝夫	国立極地研究所・特任教授	大気・雪氷放 射学	
	末吉哲雄	国立極地研究所・特任准教授	雪氷学, 古気 候学	
	I S A R-6 S O C, コンビナー 一等			
研究協力者 (注 2)				

【研究の内容】

(1) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を 1000 字程度で簡潔に以下にまとめてください。

1) 第 3 回北極科学大臣会合 (ASM3) にどのように対応するか

2020 年 11 月に ASM3 が日本で開催される。前回の ASM2 ではサイエンスフォーラムで研究者が一堂に会したにもかかわらず、その内容が本会合にインプットされなかったことから国内外の北極域研究者の間では、本会合前に研究者の意見をまとめて提言することが重要という認識になった。北極サイエンスコミュニティから政策決定者のハイレベル会合に科学的成果や提言をインプットすることは、科学者にもメリットが期待できることから、ASM3 に向けて日本の北

極研究者が中心になって何ができるのか、研究者から ASM3 へのインプットを効果的に行うにはどのような方法がよいか、インプットする内容はどのようなものがふさわしいのかについて本予算で6月に会合を実施し、次のような議論を行った。

2) ASM3 までの国際会合の有効利用

ASM3 は日本とアイスランドの共催となる。2020 年の3月上旬に ISAR-6（第6回国際北極研究シンポジウム）が日本で開催され、同下旬にアイスランドで ASSW（北極科学サミット週間）が開催される。これらの機会を使って段階的に科学的な議論の場にして行くのがよい。ISAR-6 の利用は科学的議論の口切りとなり、ASM3 開催国の日本にとっても大変意義がある。過去の ASM で議論してきたテーマを参考に ASM3 のテーマになりそうなセッションとプレナリーを実施して ISAR-6 からの声明を出し、ASSW へ渡すのがよいという意見になった。

3) 科学的インプットはどのようなものが求められるのか

過去2回の ASM では、北極域の変化と影響は、その地域だけではなく全球に及ぶことへの理解、持続可能な発展、SAON を中心とするデータと研究基盤の共有、北極域研究に関する理数科教育の強化などが議論された。これらの検証が ASM3 で求められると考える。そしてこのような北極関連の会合では、北極域の先住民コミュニティを積極的に参加させることが国際的な流れとなっている。

4) ISAR-6 の利用

ISAR-6 で ASM3 の特別セッションができたことを踏まえ、ISAR-6 に参加する外国人研究者も交えて本予算で第2回目の研究集会「Open discussion on Arctic research project coordination」を開催してシンポジウムの各セッション内容も踏まえた議論を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止により ISAR-6 が中止になったため、同集会も中止となった。現在それに代わるオンラインミーティングが予定されている。

5) 成果

日本の北極域研究者の考えを ASM3 組織委員会（仮称）関係者へ伝えることができ、ASM3 に向けて ISAR-6、ASSW、6月の ICASSX（the Tenth International Congress of Arctic Social Sciences）が科学的な議論をする場として正式に位置付けられた。本集会により、ハイレベルな会合に向けて日本の北極研究者コミュニティによる日本発の国際シンポジウムの位置付け、国際連携による透明性・公平性の高い意見集約方法を関係者に提案した意義は大変大きい。

ISAR-6 には EU 関係者、在京の大使館関係者や海外の科学系雑誌の編集者、報道関係者などの参加が予定されていたので中止になったことは非常に残念である。また、ASSW も WEB 開催となった。しかし、両者とも代替で WEB 会合を開催して引き続き議論が交わされて行くことになった。

(2) 本共同研究に関連する活動（研究打合せ、学会参加、調査等）を実施した場合には、下表に記入してください

日程(月日)	日数 (日)	活動内容	場所	共同研究員・研究協力者の参加者名	参加者数 (人)
2019年 6月21日	1	ISAR-6 における ASM3 についての 検討会	東京	青木、末吉、山口、大西、羽角、ISAR-6 組織委員会メンバー、JCAR 運営委員メ ンバー	14

【研究論文や著書等】

なし

【研究発表】

なし

【特許等】

なし

【本共同研究に関連して実施した集会(注4)等】

(注4) 共同研究者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

実施日、実施地（国、県、市など）、集会等名称、概略内容、対象者（「主に研究者」あるいは「主に研究者以外」）、参加人数（「主に研究者を対象」とした場合は外国研究機関の所属者の内数についても括弧内に明記ください。）

実施日	実施地	集会等名称	目的及び内容概略	対象者	参加人数 ()
2020年 3月3日 中止	東京	Open discussion on Arctic research project coordination	ISAR-6の議論をASM3辺イン プットするための議論	ISAR-6 参加 者	

【本共同研究の発展】

日本の北極域研究者の考えを ASM3 組織委員会（仮称）関係者へ伝えることができ、ASM3 に向けて ISAR-6、ASSW、6月の ICASX (the Tenth International Congress of Arctic Social Sciences) が科学的な議論をする場、Science Process として正式に位置付けられた。

ASM3 WEB サイト <https://asm3.org/home/>

【アウトリーチ、取材、その他】

なし